

自分の実感を置き去りにしてはいけない！

本日の、職員室での何気ない会話でのことです。「今日は寒いですね」という言葉に対し、私は「でも、アレクサは昨日より暖かくなると言っていましたよ」と答えてから、内心ハッとしました。自分自身が「今日、寒さをどう感じているか」という実感よりも、外部から得た知識（データ）を優先して判断の根拠にしていたからです。



この気付きは、青山先生のご授業での話題にも通じます。「〇〇という知識を持っている」以上に、相手が追いかけてきている今この瞬間に「自分の身体経験や主観に照らし合わせてどう判断するか」が問われていたのではないのでしょうか。

浅野先生のご授業における新聞紙の活動も同様です。単に多くの新聞紙によるワザを「知っている」こと以上に、造形遊びの中で「野生の思考」を働かせ、いかに自分なりの納得感をもって形を紡いでいくか。そこに学びの本質があるように感じます。

ともに学ぶ授業研を終えて、自らの「当たり前」をふと疑ってみる

ともに学ぶ授業研究会では、先生方それぞれの鋭い「まなざし」をたくさん共有することができました。授業を提供いただいたお二人は、どうか、私たち附属教員の「一般化されない独自のまなざし」こそが、子供を多面的に育てる教育の根幹であると信じ、明日からの実践に臨んでいただけたらと思います。

そんな先生方の多様な視点に触れる中で、私自身、ふと自分の「教科の当たり前」を疑ってみたくなりました。図画工作科を専門とする私にとって、「形・色・イメージ」という言葉は授業を組み立てる上での「共通事項」として、呪文のように染み付いています。このことの意味を自分なりに問い直してみました。

例えば「形」について、確か、ナイル川の氾濫によって失われた土地の境界を再定義するために「単位」が生まれ、測量術、すなわち幾何学が発展したと認識しています。形は数値化し、サイズ感として共有できるという点では、物理的で客観的な側面を持っていると言えます。しかし、単に数量化できる大きさや重さとしてだけでなく、「ざらざらしていて面白い」「ふわふわしていて気持ちいい」といった子供の情意面と結びつけて形を見つめ直してみると、また違った豊かな考え方ができるのではないかと思いました。

さらに、「色」や「イメージ」はどうでしょうか。例えば、国によって虹の色の数え方が違うように、文化によっても色の捉え方は違いますし、同じ赤色を見ても情熱を感じる子もいれば、怖さを感じる子もいるはずです。そう考えると、「共通事項」という言葉は、全員の知識を一つに揃えるためにあるのではないのでしょうか。

「人によって捉え方が違うからこそ、手がかり（いわゆるプラットフォーム的な役割）としてこの言葉を視点として使おう」ということなのではないか、と自身の認識をじわじわとアップデートしているところです。



一番怖いのは、自分の認識を一切疑わなくなった時だと思います。常に「どうだろう？」と自分の常識や授業観を疑い、更新し続けようとする姿勢こそが何より大事なのだと、この度自戒を込めて感じているところであります。

（木村 仁）